
装甲護神 影継

桑名 村正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

装甲護神 影継

【Zコード】

Z5704Z

【作者名】

桑名 村正

【あらすじ】

男は鉢甲と呼ばれる装甲を身に纏い、戦場を駆け抜ける武人である。

女は神技じんぎと呼ばれる能力を身に付け、武人を助ける神樂かぐらである。

主人公・五十嵐要は、武人・神樂を目指す生徒の通う天領学園で唯一鉢甲を扱えない少年だったが、一つの出会いが彼の行く末を大きく変える。

学園で出会う、様々な少年少女。

敵対する、多種多様な人物。

それらを乗り越え、彼は何を護りきるのか。

純正統派装甲・超能力殺陣 解禁

話題の『無能』編入生（前書き）

新年明けましておめでとう御座います。

今回一転して『自分が書きたかったもの』を掲載させていただきます。長編になるか短編になるかは分かりませんが、少しでもお楽しみ頂ければ幸いです。

話題の『無能』編人生

真つ直ぐに続いている廊下を一人の少年が歩いていくと、会話をしながら歩いている女子とすれ違う際に女子の腕と少年の胸がぶつかった。

「きやつ！」

「おつと…」

少年は避けるように身を翻したのだが壁際を歩いていたことが失敗だった。避けるためのスペースは精々三十センチほど。余所見をし、ふらつきながら歩く女子を避けるには不十分だったのだ。

「……失礼しました、怪我などは…」

ぶつかった女子を気遣うように声をかけ、手を差し伸べようとしたが、それを遮るように友人であるう一緒に歩いていた女子が少年の手を叩いた。

叩かれた少年の手はベクトルを変えて宙へと浮いた。

行き場の失った手を一瞬視線で追い、どうしようかと考えつつも、少年は自分の手を叩いた女子とぶつかった女子へと再び視線を戻した。

「紫埜に何をしようとしたの…」

手を叩いた女子は警戒を露わにした表情で鋭く少年を威嚇しながらも、紫埜と呼ばれた少女を少年から遠ざけようと、徐々に合間を取っていた。

「いえ…自分の所為で何かあつては申し訳ないと想いまして…」

「……か、可怜ちゃん…」

怯えた様子で、紫埜であるう女子は、素早く可怜の背に隠れてしまつた。

怯えている紫埜女子を優しい手つきで宥めながらも、可怜女子は少年を睨んでいた。

「あんた、確か五組に転入してきた五十嵐要…だったわよね？」

「…そのとおり、ですが？」

その答えと同時に可怜女子は更に険しい表情で要を睨んだ。
対して要は諦めにも似た溜め息を吐きながら顔を押された。

同年代に睨まれるような事を彼は一切していないのだが、如何せん彼の持つ事情がここ・やまと大和国立天領学園での彼の立場を最悪の状態にしているのだ。

「だつたら話は早いわ。あんたみたいのがこの学園に居ること自体可笑しなことなのに、何を平然としてその面をぶら下げて廊下を歩いているのかしら？」

「…その理屈だとアンジエを含む清掃業者の方々や警備の方々も学園散策をしていることを否定する事になりますが……」

「ぐつ！？」

要が悪気を一切持たずに反論すると、可怜は失言に気付いたように呻いた。

同時に可怜の反応を見た要は相手を怒りさせるような発言をしまったことに後悔をし、弁明しようと口を開こうとするが、先に可怜が声を上げた。

「う、うるさい！ そういう人たちは別として…あんたのような何の役にも立たなさそうな奴が堂々と歩き回っているんじゃないわよ！」

「！」

「…一応自分は邪魔にならないよう端を歩いていたのですが…」

「なら教室に引っ込んでいなさい！ なんだつたら学園に来なくても充分よ… むしろ学園に来ない方が清々するわ！」

「……」

要は何を言つても無駄だと判断したのだろうか、固く口を閉ざしてしまった。

「佐々木の推薦だかなんだか知らないけど、それならそれに相応しい実力を見せなさいよ！ あんたは…！」

暴言を吐き続けていたためか、周囲に人が集まり始めていたことに気付かず、可怜はその言葉を吐いた。

「男のくせに鈍甲つるかを扱えない無能でしょー。」

…周囲のざわつきが目立ち始めた。

可怜の言葉を聞き取った野次馬たちはたちまち五十嵐要に陰口を叩いた。

「あいつが話題の無能か…？」

「そうだ…甲竜いのつりゅうすら扱えないって…」

「嘘でしょ？ そんな男が何でこの学園に？」

「だから佐々木先生のコネじゃないの？」

「そういえば実際に装甲練習をしたとき、一人だけ反応がなかつたな…」

小声で囁きあつてゐるようだが、全て要の耳に届いていた。事実であるが故に否定することもできず、要は眞のように押し黙つたままその場に立つていた。

ただ、その表情に怒りなどの激情は見られなかつた。

ひどく落ち着いた、全ての暴言を受け入れている様子だつた。

対して少女は留まることを知らず、罵声を浴びせた。

「さつさとこの学園から消えなさい、役たたず！ さもないと…」

周囲が自分に味方してゐることで気が大きくなつたのか、可怜はその拳を要の眼前へと突き出した。拳と目の中は十数センチしかなく、もう一歩踏み込めばぶつかるであらう距離だつた。

「私の炎で、あんたを更に役たたずにしてやる！」

可怜のその言葉と共に、拳に炎が纏い始めた。

ただその炎が彼女の手を焼くことなどはなく、要の前髪だけが熱で焦げていつた。

避けようにも壁際に追い詰められ、左右は野次馬のせいで埋めつくされているために逃げることは出来ない。

紫埜と呼ばれた少女はこの状況に怯え、既に入ごみをかき分け廊下から立ち去つていた。

「…出来れば穩便に見逃してはいただけないでしょ？」

さすがに眼前の炎の熱には完全に耐え切れないのか、要は瞬きの回数を増やしながらも動じることなく、不気味なほど落ち着いた様子で話しかけていた。

一步間違えれば火傷…それどころか失明する危険性もあるにも関わらず、毅然とした態度で臨む要の態度が更に可怜の毛を逆立てた。

「ふん！ 穀潰しのろくでなしが偉そうに…なら人に物を頼む時にはどうすれば良いか、くらいは知っているわよね？」

「…」
可怜がそう言つと、要は炎を避けるように勢い良く拳の下に潜り込んだ。

「！？」

何かしらの反撃が来ると思ったのか、可怜は一步引いて要との間合いを取つた。

だが、彼女の視界に映つたのは予想外のものだった。

「…………な、何の真似？」

「土下座です」

それは要の言つ通り、見事なまでの土下座だった。

惜しげもなく自身の額を床に擦りつけ、左右対称の姿勢は見事なまでの美しさだった。それがこの場を凌ぐためのものではなればの話だが。

「出来ればこれで見逃していただければ幸いです」

「…」

拍子抜けたのか、しばらくの沈黙が辺りを包んだ。
だがそれもすぐに罵声と嘲笑によつて吹き飛ばされた。

「あははははは！ 悪いわね！ 無能でもそんなことが出来るとは思わなかつたわ！」

口火を切つたのは当然といつべきだろつか、当事者である可怜だった。

それに釣られるように、周囲も思い思いの言葉を口にし始める。

「なんだよ。いくら神樂とはいえ、女一人に立ち向かえない男つて

……」

「やつぱり噂は本当だつたんぢやないの？」

「そんな奴が俺らと机を並べてんのかよ……氣分わりい……」

「…………」

頭を下げて いる要はそれだけの罵詈雑言を浴びてもなお黙り続けていた。

尋常ではない忍耐力を目の前にしながらも、それを理解できないものはひたすらに彼を罵っていた。

その典型が、恐らくこの騒ぎの張本人である可怜だらつ。下げられた頭に対して容赦無くその足で踏みつけた。

コンクリートと骨のぶつかる鈍い音が響いた。

それでも、要是身じろぎどころか声の一つも上げなかつた。

黙つているのを良いことに、可怜はひたすらに暴力を振るい続けた。

その場にいる誰もが、要に手を差し伸べようとしなかつた。

「ほら、もつと頭を下げるわよね！？ やつてみなさ……」

「騒ぎの現場はここですね。失礼しますよ？」

暴力がエスカレートしていた所に響いた声によつて、可怜は反射的に飛び退いていた。声のした方向に可怜と野次馬が視線を向ければ、彼らの予想通りの人間がそこに居た。

ゆっくり歩み寄つてくるその男の姿は、後ろめたい気持ちがある生徒にとつては恐怖の対象でしかなかつた。

「さ、佐々木……先生！？」

さすがの本人を前にして敬称なしで呼ぶことはまずいと判断したのだろう、可怜は取つてつけたように先生などと呼んだが、そこには畏敬の念は一片たりとも混じつていなかつた。

それを察したのか、佐々木と呼ばれた教師は少しだけ笑顔を崩し、眉をひそめたがそれも一瞬のこと。すぐに元の笑顔を浮かべて口を

開いた。

「何やら無抵抗な男子に対して暴力を振るつてゐる、といつ匿名の通報があつたので来てみましたが…何事もなかつたようですね？」見回す佐々木の視線に對して真つ直ぐに見つめ返す者はおらず、全員が全員目を背けた。

だが、咎め無しと思つた全員は、次の言葉で戦慄することとなつた。

「余所見しながらぶつかつたにも関わらず避けた方に因縁を付けて拳句の果てには公衆の面前で罵詈雑言に誹謗中傷を浴びせ、武人の誇りを汚すような暴挙…野次馬の中には誰一人として正しき人…加えて恥も覚悟の上で謝罪をしている人を庇おうとはしない…そんなことがあるはずないですよね？」飯島可怜さんいいじま かれいさんに皆さん？」

全てを見ていたかのように語る教師に、その場に居た全員は罰を覚悟した。

見回す教師の視線は、彼らにとつては槍を突きつけられているような錯覚に陥らせた。

露骨な…それでいて静かな怒りを見せながらも、佐々木は相も変わらない笑顔のままでいた。

「これから三十秒の時間を与えます。罰を受けたい人は残つてください。それ以外の方は早急に教室に戻ることをお勧めします」

その言葉と同時に、生徒たちは蜘蛛の子を散らすように逃げていつた。

三十秒後。その場に残されたのは、佐々木教諭と未だに土下座中の要だつた。

「…………まだやつていたのか？」

人気がなくなると、佐々木は言葉を少し粗くした。

こちらの方が素であり、その正体を知るのは学園内でも十人いるか居ないかである。飯島が話していたとおり、佐々木が要をこの学園に推薦した張本人である。

それ以前の付き合いは全くの謎に包まれてゐるが、これらのやり

とりからそれなりの親しい関係であることは誰の目に見ても明らかだが、それを見たことのある人間がほとんどないため、周囲の認識は精々『自分の発掘した人材に甘い』程度である。

「…自分は問題の一端を担つていると判断したので…厳罰に処される覚悟は出来ています」

「それだけの覚悟が他の学生が出来るようになれば万々歳なんだがな…」

心底残念そうにため息をつきながら佐々木は天井を仰いだ。

「だ、大丈夫でございましたか？！ お怪我などはありませんでしょうか！」

「要！ あの程度の女子相手に頭を下げるとは何事だ！」

騒ぎが治まってからおよそ一分後、二つの足音が廊下に響き渡つた。

音のした方向へと一人が視線を向けると、一人の少女がこちらに向かつて走つていた。

一人は真っ直ぐな黒髪が腰に届きそうなほど長く紅い簪かんざしを差し、神楽学科独特の白い制服とのコントラストが美しかった。どこか怒りを持つているような表情を浮かべ、素早く駆けていた。

もう一人は銀色の髪を左右だけを長く伸ばしたショートカットの少女で、非常に慌てた表情をしていた。こちらの少女の特徴は何といつても学園指定の制服に身を包んでおらず、代わりとして何故かメイド服を纏つていた。

一人とも方向性は違えど、まごう事なく美人に分類されるであろう出で立ちをしていた。

黒髪制服の少女は凛とした雰囲気を纏い、スラリ伸びた…そして女性の部分は、出るところは出でている体を真っ直ぐに伸ばしていた。何らかのモデルだと言われても百人中九十八人は疑問に思うことなく納得するだろう。

対してメイド服の少女はどちらかと言えば童顔で、制服の少女と比べれば一つ二つ違つて見える。ただ、服の上からでも分かる、か

なり女性的な凹凸を持った体だった。

「… 梶とアンジェか… 大丈夫だ、特に支障が出るような外傷は無い」

「… それは良うございました！ 要さんにおれ以上の被害があつ

てはいけないと思いまして、佐々木先生へとお伝えさせていただき

ました！」

「なるほど、騒ぎが起つてから佐々木教諭が到着するまでの時間が異様に短かったのはアンジェのおかげか… 助かった」

「そういうことです。要君は真白さんにお礼でも言つておいたほうが…」

梶とアンジェが現れるとすぐに口調を変えた、佐々木の豹変ぶりに呆れながらも、要はアンジェに頭を下げようとする。が、それを礼を言おうとした相手に止められた。

「いえいえ、神樂でもないアンジェが出来る」とと言えばそれぐらいなので…」

恥ずかしそうにかみながらアンジェは両手を合わせた。自分が何かしらの役に立つたことが嬉しかったのだろう。

「けれど、あの程度の生徒ならば五十嵐でも追い払うことなどが出来たのではないか？」

ゆつくりと立ち上がる要を見ながら、梶は言った。

膝についた汚れを落とすとするとすかさずアンジェがかがみこんでズボンを叩いた。

それまでに確認などを一切取られなかつたので、仕方なく甘んじることにしたようだ。

「可能と言えば可能だが… その場合の被害は恐らく今より遙かに大きいだらうな。こちらからは一切手を出していくないから、少なくとも退学は免れるだらう」

「そんなはずはない！ 現にこの学園に入学してから一ヶ月になるが学園・神樂・武人問わず小競り合いは頻繁に見かけた！」

「ひやいっ！？」

要の言葉を言い訳だと思ったのだろう、梶と呼ばれた少女は声を

張り上げた。突然の大声にかがんでいたアンジェは驚きのあまりに飛び上がった。

だがそんなことを一切気にすることなく、桜は続ける。

「他の学生の迷惑も考えずにその場で決闘を始めたり、騒動を起こしているのにも関わらず彼ら彼女らには大きな処罰はくだされない…ならば五十嵐も正当防衛をしても何ら問題は無いはずだろう…」

今まで溜まっていた怒りをぶちまけるように、桜は叫んだ。

「……だが穢便で尚且つ確実な手段があれしか思い浮かばなかつたんだ」

「だから易易と頭を下げたのか？ 自身の誇りを捨ててまで…」

「そうだ」

熱くなつた桜に対し、要は達觀しているというべきか、諦めなのかは分からぬが、非常に落ち着いた様子だつた。

「…………クッ…………！」

一瞬だけ、桜は悔しそうに歯を食いしばりながら要を見上げたが、すぐに振り返つてその場を立ち去つとした。
さすがに何かが不味いと判断したのか、桜を呼び止めようと思は声をかけようとした。

「…………桜」

「腰抜けが名前を呼ぶな」

だが、返つてきたのは拒絕の言葉だった。

「…………」

その反応に何か思うことがあつたのか、要は三秒ほど黙り込んだが、すぐに口を開いた。

「失礼致しました、一ノ瀬さん。身分不相応の身でありながらも名を呼ぶなどという鳥滸おがましい真似をして申し訳ありませんでした」

「…………～～～～！」

突如としてよそよそしくなつた要の返事に堪らず桜は振り返りそうになつたが、辛うじて踏み留まつた。

声にならない声を上げながら、振り返ららずに要たちを背にしてそ

の場から去つていった。

そんな彼女の背を見送りながら、要は顎に手を当てて考え込んでいた。

「…相変わらずもみ…いや、二ノ宮の対応が冷たいと思うのだが…折角この学園で五年ぶりの再会をした幼馴染だというのに…アンジェは少々勿体無いお話ではないかと思います…」

「…その時までの彼女はどういった感じに接してきたのですか?」

疑問に思つた佐々木は遠慮を一切せずに問い合わせてきた。

「兄と妹…といったところだろうか…? といつても一緒に過ごしていたのは三年程度だから実際の兄妹とはかけ離れたコミュニケーーションをとつていたな…」

「宜しければどのような事が有つたかをお話していただけないでしょうか? アンジェはそのような友人が少なかつたので興味津々でございます!」

その言葉通りアンジェは目を輝かせて要を見た。

「これほどまでに人懐っこい性格をしながらも友人が少なかつた、という事実は少し要の何かに引っかかつたが、時間のことを思い出として手を振つた。

「まあそれくらいなら全然構わないが…時間が…」

「話すのは構いませんが要くんは授業に遅れないように注意してくださいね? 五組の一限は私の鉄甲基礎理論ですから…」

「…というわけだ。その話は時間があつたときにでも頼む」

「かしこまりました! それではアンジェは校内掃除へと戻ります!」

「ああ、頑張つてくれ」

「はい! 要さんも勉学にお励みになつてくださいませ!」

そう言ってアンジェは深くおじきをしてから梳とは反対の方向へ

颶爽と走つていった。

残された二人は並んで教室へと歩き始めた。

「それではまず先週の復習から始めたいと思います。教科書は仕舞つてノートだけを出してください。ああ、以前話していた通り手書きのメモであればそれを見るのも許可します」

佐々木傭兵教諭の言葉を聞いて、教室内にいる生徒のほとんどが不満げな声を上げた。

教室内では自分は出来ないなどの無意味なアピールを繰り広げあつていた。この辺は普通の学園と大差が無い。

基本、講義は共通履修科目のため神樂科の女子と武人科の男子が合同で講義を受けることになつてている。日頃大した接点もないために、互いが互いに自分の存在をこれみよがしにアピールし合つている。

しかしその中で、特に目立つた反応を示さなかつた生徒が一人いた。

五十嵐要と二ノ宮桜。

実を言えば普段通りなのだが、この一人だけは教室の空気に全く馴染もうとしない。さらにどのよくな運命の悪戯があつたのか分からぬが、二人は席が隣同士なのだ。

そのためその席の周辺だけは他に比べて声が抑え気味だ。

加えて先の（一方的な）喧嘩も有つたために場の空気はいつも以上に重かつた。

「お~い、要…」

そんな空氣に全く臆することなく、要の左隣に座つていた男が話しかけた。

声のした方向には短髪を逆立てたような、イメージとしては獅子の鬚を思い浮かべるような髪型をした男が話しかけてきていた。

申し訳無さそうに合掌しながら頭を軽く下げていた。

ある程度話の内容は予想できていたようで、分かつた顔をしながら

らも要はため息混じりに答えた。

「…何か忘れ物でもしたのか？」

「その通り。悪いがノートとメモ用紙…あとなんでも良いから筆記用具を貸してくれるか？」

「多いな」

「獅童：入学してからこれで何回目だ？」

話に聞き耳を立てていたのか、柾が要を間に挟んで問い合わせた。

「週に一回だから…これで九回目か」

「数えている余裕があれば改善するように努力をしろ」

呆れたように言葉を吐く柾に對して獅童はおどけたように手を広げた。

「努力はしているが、改善されていないだけだ」

「折角教育用記憶媒体があるのでそれを利用すれば…」

「アナログ人間舐めるなよ？ そんな物、入学して三日で破損したぜ」

「胸を張つて言つべきことか！ そして壊れたのならばさつと修繕申請をするべきだろ？…」

「使わないもののために手間暇をかけるような性格はしていないんですね」

悪びれもせぬ獅童は誇らしげに語つた。その態度に苛立ちを覚えた柾は無意識的に席を立ち上がろうとしていた。

「どうでも良いのですが、人を挟んで口論をヒートアップさせるのは勘弁して頂きたい。何でしたら今すぐ自分と龍一の席を代わりますので、心ゆくまで一人で楽しんでください。佐々木教諭に見つかった場合は一切責任を取りませんが」

「うつ…」

しかし二人の騒がしいやり取りに我慢しきれなかつたのか、今朝方変えた他人行儀な態度で要は柾にそう言つた。

「これには柾も反論することができず、大人しく乗り出しかけた身を落とした。

対して獅童龍一はそんな榎の反応を見て楽しそうに小さく笑っていた。

そんな二人の様子に頭を押さえながら要是カバンの中から頬またものを全て出した。

大分使い古されたようなノートにページの所々が切り取られているメモ張、そして今時珍しいH Bの鉛筆だった。

「これで大丈夫か」

「どうも。やつぱり実際に手に感触が残るというのが手書きの良さだよな?」

「しかし龍一ほどの頭脳があれば俺のノート無しでも充分抜き打ちに対応できるだろ?」

「そうでもないさ。佐々木教諭は授業中の雑談すら試験内容に出す、それを全部記入しているから、というのもあるが何といつても解りやすいからな」

「学年一位が何を言つている」

「いや、冗談抜きで…しかし一ヶ月で大分くたびれた上、既に残りページが五十枚ノートの内五つ…それだけアンジエちゃんだったつけ? は頑張っているのか?」

「ああ、教える側としてはあれだけのやる気を見せられればこちらもその努力に答えなければと思つほどだ」

「ほ~…」

感心したように声を上げながら龍一はノートをざつと見ていた。

「しかし、それだけ熱心なのにノートはお前持ちなのか?」

「そのほうが仕事に集中できるからだそうだ。『自分で持つていては仕事をそつちのけで読み込んでしまつ』かもしれない、と」

「成程、納得」

互いにそんな場面を想像できてしまったのか、二人は抑えた笑いをした。

「…と、いこか。というより既に次回以降の分も書いてあるのか…話していくうちに目的のページが見つかったのか、龍一は机の上

にノートを大きく広げて置いた。

要も授業用のノートを広げて教壇の方へと視線を向けた。龍一に渡したものは授業用ノートを要流に（他の人向けに）まとめ直したものだ。

そのため彼の持ち物は他の人より何倍も多い。極論を言つてしまえば先程梶の言つた教育用記憶媒体を持ち運びすればカバンすら必要ない。大半の生徒は媒体を使用しているので、毎日大きめのカバンを持ち運びしている要は『無能』の件を別にしても学園の中で浮いた存在だった。

この媒体は学園生用に個人個人に合わせて纖細な調整や配列の変更などが必要になつてしまつ。セキュリティ面に置いては盜難の心配などは一切ないが、代わりに全てがオリジナルという大量生産性が全くと言つていいほど無い。

要の場合は突然の転入だつたために媒体の製造が間に合わず、このような時代遅れな方法でしか講義の内容を記録できない、という事情があつた。

と言つても、要も龍一同様アナログ派であるため、製造が追いつかなつた記録媒体を（幸い企画の段階だつたので大きな被害は出なかつた）断つた。

「それではまず鈔甲について…これはあえて神樂科の方に聞いてみましょうか」

予想外の質問対象に女子の方からは軽い不満の声が上がつたが、反論しても覆ることは無いと判断したのだろうか、すぐに静かになつた。

佐々木は一同を見回して誰を当てよつかと考える。

そして運が良いのか悪いのか、目のあつた女子へと声をかけた。
「それでは飯島さん。鈔甲…いや君の場合はブレイドアーツと言つた方が良いでしょ？…これの特徴を知つていい限りで良いので、挙げてみてください」
「は、はい…？」

いきなりの指名に素頓狂な声を上げながら、先程要に暴言を吐いた女子が勢い良く立ち上がった。

「え、えーと… 鋸甲は現在この世界における最大の装備で… そ、装甲することによってその男性の戦闘力を大幅に上げることのできる鎧… です… ?」

「最後が疑問形なのはあえて無視します… 補足すれば鋸甲を持つ人間は自然治癒においても優れるようになります… それでは、その装甲する人間は総称して何と呼ぶかは?」

「… 武人です」

「正解です。座つて大丈夫ですよ」

佐々木がそう言つとすかさず飯島は腰を下ろした。同時に胸をなで下ろした。隣では紫亞が深く息を吐いた彼女を労つていた。

「それではもう少し詳しい内容を尋ねたいので… 一ノ富さん、知つてている限りで良いのでお願ひできますか?」

「分かりました」

飯島可怜とは全くの対照的に、指名された一ノ富桜は堂々とした態度で立ち上がった。

場の雰囲気に呑まれるような様子は一切なく、むしろ彼女が立ち上がつたことによつて塗り替えられるような感覚にでも襲われる。

「鋸甲は各国によつてその特徴が顕著で、この大和において言えば銃火器が主流となつた現在でさえも和刀わとうを装備した鋸甲がほとんどです… 使われないことがほとんどではありますが…」

「… ふむ」

「最大の特徴はこれが『男性』にしか扱えない、ということです。更に全身装甲できる人間は珍しく、適性があれば最優先でこの学園への入学が確約されます」

身に覚えのある生徒もいるためか、小さくではあるが自身がいつごろ適性が判明したかの雑談が生じた。

だがそれもすぐに佐々木の咳払いによつて再び沈黙した。

「それでは、何故そのような優れた点を持ちながらも男尊女卑の世

界になつていないことについては…大谷くん、お願ひします

「すいません、先週は講義中ずっと寝ていました！」

「はい、潔くてよろしい。褒美といつてはなんですが小校庭を十周してくださいください」

満面の笑みを浮かべながらも背後には阿修羅の気迫を見せつけながら佐々木は言つた。

さすがに教師でかつ武人であるこの男に不満不平を言う勇気は無かつたのか、大谷は命令と同時に教室から勢い良く飛び出していった。

「…講義内容を聞いていなくとも少し考えればすぐにわかる常識問題だつたのですが…まあ放つておきますか」

「…相変わらず容赦ないな、教諭は…確かに小校庭つて…」

「一周八百メートルだつたな。十周だからハキロか」

「決闘場外周でないだけましか…百キロ以上は脛までに走り終わらないだろうからな…」

「それでは氣を取り直して…そこで話している獅童くん」「諒解」

ここに学年一位の男が指名されたことによつて教室内は少しの喧騒に覆われた。

入学時の試験では天領学園創設以来の最高点を叩き出し、更には実践形式の試験では唯一試験官を氣絶させた男だつた。試験官も全員、大和の防衛軍事組織『大和国衛軍』に軍兵として所属した事のある人間であるにも関わらず、実践試験開始一分で完膚なきまでに、それも文句無しになるまで叩きのめしたのだった。

文武両道を体現させたような男で、そのことを鼻に掛ける訳でもなく、人当たりも良いので学年内では全生徒に信頼が置かれていた。…五十嵐要が編入するまでは。

要の編入以降、突如として彼は『無能』である要と親しく接するようになり、それまでの交友関係をほぼ全て叩き壊すかの様に他の生徒との付き合いを絶つた。

何が原因であるかは、一切知られていない。

それこそ一時期は『脅迫』などの噂が上がっていたが、龍一が要に接するときの態度は、今まで誰にも見せたことが無いほど明るく自然であり、それまでの表情は全て偽りだつたと疑つてしまつほど

の物だつた。

堂々とした態度のまま、龍一は返答を始めた。

「男性は鈔甲を装甲出来ることに対し、女性は『神技』を扱える、ということです」

「続けてください」

「男性は練造もしくは铸造した…前者を業物、後者を数物と呼ぶ鈔甲を装甲することが出来るようになつて始めて武人・仕手と成り得るのに対し、女性は先天的にもしくは後天的に超常的な現象を操作できる『神技』を身に付けています。加えて武人は鈔甲なしではただの人であることに対し、神樂は自身の制御の下自由に神技を扱える…これが理由です」

「それでは、神技を扱える女性のことを総称して何と呼ぶかは?」

「『神樂』です」

「よろしい。座つて良いですよ」

佐々木の許可を得ると龍一は要に感謝の意を表しながら座つた。

要は大して気にしない様子で自分のノートで前回の授業の復習をしていた。

「それでは復習はこの程度にして次の範囲へと進みます。今回は鈔甲と神樂について話していくつと思つています…ではスクリーンに注目してください」

言葉に従うと画面に大きな画像が映し出された。

そこには武人科の生徒にとつてはある程度見慣れたものが複数の形態で映つていた。

「知つてゐる人も多いとは思いますが、今映し出されているものは現在大和国衛軍の主流鈔甲である丙龍の戦闘形態と自律形態です」

画面右側には人の形をした装甲が、左側には鋼で出来た犬が投影

されていた。

「鈎甲は戦闘形態では操縦者…仕手の身体能力を大幅に上昇させるという機能が備わっています。そして…この丙竜の場合は二つの飛火の推進力と疾駆の揚力を利用することによって空中戦を開拓する事が可能です」

鈎甲の背面部が映し出されると、背筋を中心線にして左右対照に飛火と羽のような疾駆が装備されていた。

補足すれば、飛火の推進力と疾駆による揚力を利用した鈎甲の飛行を『騎行』と呼ぶ。

「対して自律形態ではその名の通り自律行動をすることが可能ですが、それに加えて仕手の命令に従順に従い情報収集をするなど、仕手の命令次第で可能なことがかなり増えます」

「自律行動」ということは、鈎甲は人間のような知恵がある生物ということですか？」

疑問に思った男子が手を高く上げて問い合わせた。

「知恵…と言えばそうなのかもしませんが、少し生物とは違いますね」

佐々木は質問に對して丁寧に受け答えた。

「鈎甲は業物・数物問わず人工知能が備え付けられており、基本は事前に鍛冶師が用意した行動を臨機応変に実行しています。そして仕手の命令を人工知能で解釈することによって仕手の助けとなります…この説明で納得できましたか？」

確認すると、大丈夫だったようで、質問した男子は頷いて席に着いた。

その反応に満足した佐々木は他にも質問がないか見回してから講義に戻った。

「鈎甲に関しては一旦ここで止めて…次は神樂の説明に移りたいと思います」

声と共に画面が変わったが、今度は画像ではなく単純な文字の羅列が映し出された。

所々赤文字で強調されており、その中には聞きなれた単語も幾つか載っていた。

「神樂…大英帝国周辺ではプリーストと呼ばれていますが…彼女たちは本来人間では到達できない超常現象「神技」を扱うことができること、ということは前回の講義で話したと思います」

一同は揃つて頷いた。

「神樂の名前の由来を話しておくると、神代の女性が神々の怒りを鎮めるために奉納の舞をしている最中に突如として炎を扱えるようになり、それを混じえた舞を納めるとたちまち災害が起こらなくなつた…という神樂舞伝説から来ています…脱線すると長くなりそうなので、聞きたい方は昼休みや放課後に個人的に来てください」

生徒の大半が知らなかつたのか、所々で感嘆の声が挙がつていた。桺も似たような反応をしていたが、ふと横を見れば要も龍一も大した驚きなく黙々と佐々木の言葉を書き出していた。

その様子を見て桺は慌てて取り繕つたように表情を戻したが、二人はそんなことを微塵にも気にしてはなかつた。

「話を戻して…ここからが今日の大変な話になりますので、聞き逃さないよう充分に耳を傾けてください」

一つ前置きをすると、教室は先程の喧騒が嘘のように静まり返つた。

所々で息を飲む音が聞こえそうな静寂の中、佐々木は静かに語り始めた。

「本来ならば互いに力を持つた人類は男と女に別れて戦争をしていてもおかしくはありませんでした…というよりも大和書紀には男女の諍いがそれこそ戦争規模で行われていたという記述もありますが…今の貴方たち、そして歴代の武人と神樂で…男と女に別れて争つた、ということを少しでも聞いた人はいますか？」

佐々木の問い掛けに対し、一同は揃つて首を横に振つた。

「では、そのことに関しては…五十嵐君、お願いできますか？」

「……諒解」

佐々木に指名された要は不承不承といった様子ではあつたが素直にしたがつて席を立つた。要は男子の中でも背が高いうえに体格も良い方に分類されるので、かなり目立つた。

周囲は陰口を叩いているのか、少しだけ騒がしくなつたが、佐々木が睨みを効かせると再び構内は沈黙に包まれた。

「その理由は、武人の鉢甲と神樂が融合・主に『封神』^{ほうしん}と呼ばれているこれをすることによって、本来の鉢甲の能力に超常現象を扱う神技が『増幅して』備えられるからです」

「…知つていい限りで良いので、歴史面で続けてください」

佐々木が要を促すと、静かに頷いた。

「先に常人の域を超える能力を持つようになつた神樂は、大和書紀によれば自分たち女性の権力を強めるための争いをしばしば男性に對して起こしては勝利を続けていましたが、そんな神樂を凌駕する存在が現れました……これについて詳しい記述はどのような書にも記載されていないため割愛させていただきますが、その存在によって両性は大和を守るために手を組みますが、それでも凌ぐことが精一杯、という状況に陥りました」

「…ここまで話を見たが、ここまでの話を充分に聞いている人間は一割にも満たない。

残りの九割は『無能』が話している、という理由だけでまともに聞いておらず、良くて今までの講義内容を思い出しながら端末に記録、悪くて船を漕ぎ始めているという状態だった。

だがそれでも要は気にすることなく話を続ける。

「大和の場合は、そこで何の奇跡か、天から五つの鎧が…後に『神代五鉢』^{みよごけん}と謳われる天叢雲・十拳・草薙・天之瓊矛・天羽々矢の五領の鉢甲がさずけられました。現在ではどれも大和の有名大社に奉じられたか行方不明と、とにかく一般人には触れられない状態ではありますが、これにより男性が戦う力を得ると同時に『神樂と融合』することによって莫大な力を得、その驚異となつた存在を追い払うことにつき成功し、以後武人と神樂は協力関係にあり、大和各州での争い、世界との対立は有りましたが、男女での争いが起こることはあ

りませんでした。他国にも似た伝説は残つておりますが、自分が知つていることはここまでです」

話し終わると、要是佐々木の了解を得ずそのまま黙つて着席した。

「ありがとうございます…と、今五十嵐君の話した内容の一部を試験に出しますので悪しからず」

その発言に話をまともに聞いていなかつた生徒たちは「反発の声を上げそつたが、それを佐々木は一喝して鎮めた。

「確かに私はあなた方の入学時に、講義・訓練は参加することに意義がある、と言いました。が、今声を上げた生徒は、出席はしているが参加は一切していない、というのが私の判断です。これに対しで反論があれば今すぐどうぞ」

次の瞬間、講堂は不気味な静けさに覆われた。

誰一人としてこれを論破出来る生徒はこの場に居なかつた。

五十嵐・獅童・二ノ宮の三名は、別段気にする様子も無く、自身の記録に努めていた。

「…では続けますが…実を言つてしまえば私が今日話そつとしたことはほとんど五十嵐君が話してしまつたので…補足程度に幾つか…大和では『神代五鉄』という現在の業物を超える鉄甲がありましたが、異国にも同様に『国守の鉄』となるものが存在しました。大英帝国では『円卓十二鉄』、印度では『神武鍊劍』…これは大和の字に当て嵌めているため本来は違う読み方ですが…今回はそんな伝説は大和だけに存在するものではない、ということを理解していただければ結構です」

残り時間を一度だけ確認して、佐々木は話を続ける。

「現在では『国守の鉄』を元に練造したものを『業物』、大量生産性に重点を置いて鑄造したものを『数物』と呼びます…ここまでで

質問は?」

佐々木が生徒に問いかけると間も無く一人の生徒が手を挙げた。

「佐々木先生の鉄甲の銘を教えてください」

「私の……ですか？」隼風……と言つてもあまり有名ではない鋤甲なので……そしてこれ以上の話は手の内を明かしてしまうことになるので話せませんね……他には……無い様なので……」

話が終わつたのか、佐々木が教壇の機械を幾つか操作するとスクリーンはゆっくりと上がつていつた。

「それでは、今日の鋤甲基礎理論はここまでにします」

その声と一緒に一限の講義終了の合図が鳴つた。

『無能』の所以

一・二限は室内講義だったが、三限は場所を移させていた。

晩春と初夏の狭間、吹き抜ける風は徐々に暖かくなり始め、つい二か月前は桃色に染まっていた木々は新緑へと移り変わり、夏の到来を告げ始めていた。

照りつける太陽の下、武人科一年五組の面々は小校庭に集合していた。

生徒たちは何列かに並べられ、その視線の先にはあからさまな『的』が設置されていた。

それぞれの手には小型の銃が握られており、全体がまだかまだかと興奮を抑えきれない様子で教師の到着を待っていた。

銃といつても中に装填されているのは殺傷能力を極力抑えられたゴム弾であつて実弾ではないのだが、そこはやはり本格的な訓練になりつつあることを喜んでいるのだろう。

入学後の二ヶ月間は徹底的に基礎体力をつけるための訓練であり、ただひたすらに下地を整える地味なトレーニングの繰り返しの日々だったのだ。

大和で数少ない鉄甲を専門的に扱う学園とはいえ、武人科卒業生全員が鉄甲を纏つて戦う、というわけではない。むしろ鉄甲を纏うつままりは大和国衛軍などに所属できる人間は極めて少数であり、年に十数人輩出出来れば上出来である…それほどまでに狭い門である。その争いに敗れた人間は学園で培つた経験を活かして要人警護・警邏（警察）などの職に就くことが多い。

しかし、そんな職業に就いた卒業生も、ここ数十年起つてはないが、有事の際には防衛力として駆り出されることがある。これはそのために備えた訓練であると言つても過言ではない。

そのため、今回のような実践的になりつつある訓練に対しても多くの生徒が期待に胸を膨らませていた。

一部…というよりも一人を除いて…

「待たせたな！ それではこれより射撃訓練を開始する！」

始業時刻より僅かに遅れて、校舎からいかにも教官といった風貌の男教師が現れた。

生徒の中には遅れることを咎めるような視線を送っている者もいたが、大半はそんなことよりもすぐにでも練習をさせてくれ、と意気揚々としている者だった。

「昨今の戦闘において、佐々木教官の講義を聞いていれば分かると思うが、徐々にではあるが遠距離からの攻防戦へと移りつつある！ 俺はお前たちに基礎的な射撃技術をこの一年で叩き込む！ 覚悟は良いな！」

このような水無月の太陽に負けぬ熱い宣言から本格的な射撃訓練が始まった。

最初は大まかな基礎知識・動作を教え込むが、十数分後にはすでに順々に「実際に撃つ」練習をし始めていた。

火薬の爆ぜる音が断続的に響く。

半分以上は教官の予想以上の命中率を上げており、所々で感嘆の声があがっていた。

その中でも抜きん出た成果を上げているのは当然というべきだろうか、獅童龍一だった。

シングルハンドで針の穴に通すほどの正確さで悉く的の中心を打ち抜いていた。

それも数発程度ではなく、数十という数だ。

一発の弾丸も外さないその精度は、今まで数多くの生徒を見てきた教官をも驚かせた。

「…さすがは今世代の天才だな！ お前たちも獅童に負けないよう努力を…！」

と、ほかの生徒に対して激励の言葉を挙げようとしたところで、突如発砲とは異なる爆発音が響いた。

何かと思って全員が音のした方向へと視線を向けると半ば予想通

りの光景があつた。

「…そこ…お前…！」

「…なんでしょ…うか？」

教官は怒りを抑えたような低い声をひねり出していたが、当の本人は何事もないような平然とした様子でそこに立っていた。手に握られているのは、暴発によつて原型を留めることができなくなつた拳銃だつた。

要の周辺には金属片が飛び散つてゐたが、幸いにも他の誰かに当たるような事は無かつたのか、誰も痛みに声を上げるような事態は免れた様だつた。

「何をどうすれば学園側で充分に管理されていた銃が暴発するなんて事が起る！」

「自分は銃火器の類を触れば、問答無用で破壊してしまつ性質があるよ…」

「そんな馬鹿げた話があるか！ どうせ俺の話を全く理解できずに適当に弄つていたら壊したつてところだらう…」

至極真面目な顔をしてふざけた言い訳のよつたと、教官は堪忍袋の尾が切れたのか肩をいからせながら要へと近寄つていつた。

そんな鬼気迫るような教官に一切臆することなく、要はその場に静かに立つていた。

二人の距離が互いの手が届くところになると、教官は何の前触れも無く拳を大きく振り上げてそのまま要の顔面へと叩き込んだ。

「お前、名前は！？」

「…五十嵐です」

立つたまま胸倉をつかまれて激しく揺さぶられながらも何とか声を出すことが出来るが、その名前を聞いた教官はようやくこの男が

『そうである』事を理解した。

「…成程、佐々木教諭の推薦で転入してきた『鉄甲を扱えない武人』はお前のことか！」

吐き捨てるように言つと、胸倉を掴んでいた手を突然離して突き放した。

「……つと……！」

教官は少し体勢を崩したがすぐに立て直して要の顔を指差した。
「良いか。今後俺は一切お前の面倒は見ない！ 勝手に周りの協力でも仰いでいる、佐々木教諭の推薦だとすればそれぐらいは出来て当然だろうからな！」

「……分かりまし……」

「……んん？」

要が返事をしようとしたところで、教官は別の場所へと視線が向かっていた。
その先では何発もの弾丸を撃ちながらも全く的に当たらない生徒がいた。

彼の周囲では他の生徒が嘲笑を浮かべてあり、そのプレッシャーに耐え切れず更に緊張して的を外すという悪循環に陥っていた。

「貴様！ この程度の距離で当てることができないとは何事か！」

「ヒツ……！？」

教官の怒鳴り声で体を竦ませた男子は怖々と顔を向けた。

先程の要への体罰が余程印象に残っているのだろう、教官に睨まれた彼は蛇に睨まれた蛙のように体を強ばらせた。

「お前も五十嵐のように一発叩き込めば……！」

要の時同様拳を大きく振り上げて彼に叩き込もうとした。

少年は教官の握りこぶしを見て顔を守るように両手で壁をつくり、顔を背けた。

が、その拳は彼に届くことは無かつた。

「教官。申し訳ないが、現在は自分に対しての罰の最中だ。それが終わるまでは他の事に気を散らさないようお願いしたい」

「衝撃がこない事をその男子が不思議に思つてゆっくりと目を開けようと、五十嵐要が教官の一撃を平然と手の平で受け止めていた。

当事者である一人は何が起こったのか分からぬといつた表情を

浮かべながら要の顔を見た。

相変わらずの無表情ではあるが、その瞳に静かな怒りが宿つているのが、睨まれた教官には嫌といつほど感じられた。

「い、五十嵐…貴様…何時の間…」

教官が何かを言い切る前に、一人の近くで破裂音が響いた。

弾丸は教官の鼻を掠めながらも見事に立体映像標的へと命中した。音のした方向へ三人が視線を向けると、今世代の天才・獅童龍一が感情のない表情で銃を構えていた。

人に当たりかけたにもかかわらず平然とした態度を取つてゐる彼に對して、教官は得体のしれない恐怖に襲われざるを得なかつた。

「失礼、外しました」

「し、獅童！　お前がいる場所はここではないだろつ！？」

「先程教官から、敵だと思つた者には容赦無く引き金を引け、と教わつたのでそれを実践したまでです。そして他にも被害が出ないよう距離を詰めようと思つて実行した結果です」

動搖続きの教官に對して一向に平常な態度を保ち続ける龍一は、遠巻きに眺める生徒たちさえも黙り込むほど恐ろしさを持つていた。

銃口を教官の眉間に向け直し、撃鉄を起こす。

その間僅か0・1秒。

シングルアクションの拳銃とはいえ、これだけの予備動作時間ならば素人のダブルアクションの拳銃にも速さ負けをすることはないだろう。

教官は腰に装備した銃を取り出す暇もなく、ただその場に立ちすくむのみだつた。

「ゴム弾とはいへこの距離ならばかなりのダメージになるでしょうね。当たりどころが悪ければ一度と目覚めることができなくなることもありますしね…」

「ヒツ…！？」

「かな…五十嵐の指導なら俺が請け負いますので、教官は他の生徒

にでも『指導』でもしておいてください。腰が引けていてもそれぐらいは出来るでしょう?」

それだけ脅迫すると龍一は銃口で教官の額を突ついた。
それだけで脅しとしては充分だったのか、教官は足をもたつかせながらも獅童・五十嵐両名から大きく距離をとるように逃げ出していった。

「やれやれ。仮にも教えるべき人間が教えないというのは職務放棄にも程があるだろう…」

呆れたように気迫を緩めながら龍一は拳銃を仕舞った。

殴られそうになった生徒の方へ視線を向けるとそこには既に誰もおらず、少し顔を上げると覚束無い足取りで逃げ出している生徒が見えた。

「そして何の礼も無しに逃走、か…助けなかつたほうが正解だつたんじやないのか?」

「思わず体が動いた。後悔も反省もしていない」

「そして一番損をする…か。相変わらず報われないな?」

手馴れた様子であるところから他の生徒にも、彼が訓練無しでも充分に通用することが感じられる。

「…しかし教官相手に脅しとは…いや、『いつも』どおりか…」

「今までほどだけ暴言を吐こうとも黙つてはいたが、さすがに要相手に手を擧げられれば俺も黙つてはいないぞ」

「…」の場合は…あー…わー…さすがかつこいいだいて…で良かつたか?」

「棒読みな上に疑問形か…意味が良く解つていらないなら無理して使わなくて良いぞ…それに俺にはそんな趣味は…」

「え? お一人は薔薇な関係ではないのでござりますか?」

「断じてない!」

横からの疑問に龍一は力強く断言した。

「…ところでアンジーはどうしてここにいるんだ?」

要の指摘通り、要と龍一の会話を見守るような立ち位置にアンジ

エはいた。

学生服とは異なる黒基調のメイド服はどこから見ても田立つものでありながらも恥ずかしがるよつた様子は一切なかつた。

「あ」

要の言葉にアンジエは思い出したよつに手を叩いて、数秒の間固まつた。

何かと思つて待つてみると突然人が変わつたかのよつに慌て始めたのだつた。

「申し訳ございません！ アンジエは要さんのケガを聞いて駆けつけたといつににも関わらず盗み聞きした拳句処置が遅れてしまつた！」

「落ち着けアンジエ。それにあれはどう見ても盗み聞いていない」むしろ堂々とした立聞きで、参加している以上は会話として成立してもおかしくはない… そう思ひながらも要は慌ててtingるアンジエを落ち着かせよつとした。

落ち着かせよつと挙げた両手を見て、アンジエはよつやく自分が呼ばれた理由を理解して手に提げていた救急箱を地面において広げた。

「要さん！ すぐに応急処置をしますので座つてくださいませ！」

「…いや、この程度だつたら大した痛みは…」

「そうだとしても少なくとも火傷や切り傷が有るかもしません… すぐにでもお見せくださいませ！」

普段のほほんとした雰囲気とは全く異なる気迫を持つたアンジエに逆らひよつとができず、要は大人しくその場に座つて両手を差し出した。

すぐにアンジエはその手をとり、じつと眺めた。

「かすり傷は一の腕に小さいものが一つ… 火傷は親指付近に両手に一つづつ… これぐらいならばアンジエでも何とか…！」

ケガを把握したアンジエは右脇に置いた救急箱から拳二つ分の大きさを持つ液体の入つた瓶を取り出した。

要はアルコールか何かかと思ったが、蓋を開けても臭いらしきものが一切なかつたので何かと思って見ていると、その液体を腕と手の傷に大胆に振り掛けた。

「おい、アルコールをそれだけかけるのはまずいんじゃ……？」
「大丈夫でござります！ これは单なる水です！」

「…水？」

「はい！ アルコールはあくまで傷口周辺の雑菌細菌を殺すために使いますが、傷口に直接塗りこんでは傷を治す菌まで殺してしまいます！ 水ならば雑菌を洗い流すことだけが出来るので、簡単な傷にはアルコールよりむしろ水の方が最適なのです！」

説明しているうちにアンジェは手際よく応急処置を進めており、説明が終わる頃には既に包帯を巻き始めている時だった。

半ば大袈裟に巻かれている感じもしたが、アンジェの必死な表情を見ては要も断るに断れなかつた。

「…これで大丈夫でござります！」

全ての処置が終わると、気が抜けたのかアンジェはいつもどおりの柔らかい笑みを浮かべた。

「…申し訳無いな、アンジエ」

「いえいえ、これくらいでしたらお茶の子さいさいでござります！」

「しかし暴発してから五分と経つていないので…よく要が怪我したと分かつたな？」

「あ、はい。それは…」

と情報源を言おうとしたところで突如アンジェが悲鳴をあげながら姿勢を崩した。

辛うじて倒れたりすることはなかつたが、立つのも精一杯といった様子になつていた。

「か…体が重い…です…」

「だ、大丈夫か！？」

「な、何とか…」

アンジェは全身に重りを着けたような感覚に数秒襲われたが、そ

れもすぐに收まり少し息を整えたあと、普段通りの姿勢へと戻った。

「…さつきの神技から判断すると、情報提供者の名前を出すな、つていうことかな？」

「そ、そのようだ」「やりますね…口止めされていたことをつっかり忘れておりました…」

「…気をつけておけよ？ アンジェは一般人なのだから、真っ当たり神技をぶつけられたらひとたまりもないだろうからな…」

「…私も神樂の皆様のように、お役に立てる力があればよかつたのですが…」

消え入るようなアンジェのつぶやきに、二人は思わず黙つてしまつた。

聞こえるか聞こえないかほどの小さな声だったが、その言葉は一人の心に深く突き刺さつた。

理由の半分は、今の、気遣いが出来ていなかつた発言に対する後悔。

もう半分の理由は、彼も一度アンジェのよつな気持ちになつたことがあるゆえの同情。

そんな時に下手な慰めの言葉をかければ悪化することも重々承知していたため、要も龍一も言葉を慎重に選んでいたのだった。

だがそんな雰囲気もアンジェの言葉によつて吹き飛ばされた。

「なのでアンジェはアンジェにできる精一杯のことと皆さんをお助けしたいと思います！」

先程見えた陰りが嘘だつたかのように明るい笑顔を浮かべながら、アンジェは意気込んでいた。

すると突如校舎の方から鈍い大音が響いた。

生徒たちは何かと思つて音のした方向へ顔を向けるが、別段煙が出ているといったような異常は起こつてないということと、学内の教師に慌てた様子が無いということから三人は特に大した問題は無いと判断して会話に戻つた。

「…校舎の方で何か有つたようなので、アンジェはお掃除に向かわ

せていただきます

「……わかつた。ただし、一人で解決できないようなことがあれば迷わず俺たちに相談してくれ。可能ならばなんでも手伝うからな」

「右に同じ。無理して一人で背負うとろくなことにならないからな」
「お気遣い感謝いたします、要さん獅童さん！ それでは失礼致します！」

元気よく挨拶すると、さつそつと小校庭から立ち去つていった。
背中を見送つていると「一度三限終了の号令がかかっていた。

「……嫌な事を思い出したな」

「同感だ。だからといって田を背けるわけにはいかないだろうが……」

二人は揃つて空を仰いだ。

雲の少ない、良くな晴れた青い空だった。

対照的に一人の心には見えない陰りが生まれた。

何を思つて、何を見つめているのか。

二人以外に知る人間は居なかつた。

「……要」

「何だ？」

しばらくの間が生まれたあと、龍一が先に口を開いた。

「……『あの時』の後悔を、絶対に俺は忘れない……もう、あんな無力感を味わうのは二度と『ゴメンだ』

「……そうだな、俺も同じことを思つた……」

二人の決心は、誰に聞こえるというわけもなく、空へと消えていつた。

「次は剣術の訓練に変わつたんだつたよな？」

「そうだな。確か今日は模擬戦を時間いっぱい、という話だつたから……」

要は龍一の意図を察して軽く笑つた。

同時に、龍一も釣られて笑つた。

「それじゃあ、お相手お願ひします、と……」

見守る少女

少し時間を遡つて三限開始頃。

場所は神樂科実技訓練教室に移る。

彼女たちも武人科同様ようやく実技的な訓練へと入るようで、現在は小試験形式で順番に神技を発動している最中だった。

少し離れた場所に置かれた立方体に対して神技をぶつけるという、至極単純なものではあつたが、だからといって容易というわけではない。

的は一立法メートルの大きさで、それに『まともに』当たなければならぬのだ。

距離は十メートルほど。

これに苦戦する女子生徒がかなりいたために、後ろの番号である桺に回つてくるまでの時間がかなりあつた。

（一つだけ用意するのではなく、複数の的と教員を用意すればもっと早く終わるのではないか……？）

そんなことを思いながら待つていたが、それでも桺の番が来るのはまだ大分先だった。暇になつて何となしに外を見てみれば、丁度武人科一年五・六組の生徒たちが射撃訓練に取り掛かっているところだった。

視線は自然というべきか、桺の幼馴染である要へと釘付けになつていた。

拳銃を暴発させながらも驚いたような素振りは一切見せず、平然とただの鉄くずとなつたそれを見下ろしていた。

「……あれは……！」

視力のよい桺は要の手が（重度は分からぬが）火傷を負つていることに気付いて思わずその場から駆けつけようと腰を上げかけた。だが、現在訓練中ということもあるが、今朝突き放すような言葉を言つてしまつた手前、どのように接すれば良いかがわからなかつ

た。

「…どうすれば…」

「校舎のキレイは～アンジェが守ります～」

悩んでこると廊下から聞きなれた声が耳に入つた。

機嫌がよさそうに歌いながら掃除をしているようだつた。

(…「れだ…！」)

そう思つた桜は視線を気にすることなく立ち上がり、廊下へと走り出した。

勢い良くドアを開けるとアンジェは「ひえい！？」とよくわからぬ悲鳴を上げて飛び退いた。

その反応を見て桜は一団自分を落ち着かせてからアンジェに声をかけた。

「申し訳ない、アンジェ！ 一つ頼まれてくれないか！」

「は、はい…！ アンジェに出来ることであれば…」

慌てた様子の桜を見てただ事では無いと判断したのだろうアンジェは姿勢を正して彼女と向き合つた。

「さつき大校庭で要が銃を暴発させて火傷を負つたみたいだ！ 急いで応急処置を… ただし私が見ていた、ということは黙つておいでくれると…」

「かしこまりました！ ここはアンジェに任せて、桜さんは授業にお戻りくださいませ！」

言うが速いか、アンジェは間も無くその場から駆け出していった。その背を見送つてから自分の席に戻ろうとするが、何事かと事情の分からぬ生徒と教師はそろつて桜に視線を投げかけた。

「…お騒がせしました」

軽く頭を下げて自分の席に戻つたが、未だに不安は拭えずに結局意識は授業ではなく要の方へとむいていった。

「…？」

その瞬間、丁度要が教官に何の抵抗もなく殴られる場面であり、思わず窓から怒鳴りそうになつたが、寸での所で踏みどりました。

要を底いたいという気持ちと、どこかで昔のような要らしく戦つて欲しいという気持ちが混ざつて待つたのだった。

だが期待に反して要は何をするでもなく素直に教官の言葉を受けていた。

その姿に対しても桜は更に裏切られたような気持ちに襲われた。

これほどまでに変わり果てた要の姿を見たくないと思い始めた矢先に、今までの事全ての苛立ちを吹き飛ばすような事が起つた。

教官が怒りの矛先を要から少し離れた場所で的から外し続けていた男子へと変え、殴りかかるうとしたところを要が寸前で受け止めた。

今まで自分のことでは一切抵抗を見せなかつた要が、理不尽な暴力を止めるために動いたのだった。

一秒にも満たない短い時間で、十数メートルの距離を詰め、易易と教官の拳を受け止めるという芸当をしながらも、平然としている様子が教官を怯ませた（と桜は見えた）。

その後、教官を龍一が追い払い、アンジェが駆けつけて手際よくやけどの手当を終わらせた。

安堵に思わず溜め息を零しかけたところ、龍一とアンジェの会話が聞こえた。

「しかし暴発してから五分と経つていいのに……よく要が怪我したと分かつたな？」

「あ、はい。それは……」

「…………!?」

アンジェが思わず桜の名前を出そうとしたところを妨害するように半ば本能的に神技をアンジェに向けて発動していた。

神技によって姿勢を崩したのを見て、すぐに解除した。

力を抑えているためケガをすることはないだろうが、軽い脅迫として思い出させるのには充分な威力だったようで、アンジェは桜の名前を上げずに大校庭から立ち去つていった。

自分の名前が出されなかつた事に安堵していると、桜の目の前に

神楽科の教師がいることにようやく気付いた。

「…………あの……」

「…………なんでしょうか？」

冷静を装いながら返事をするとやつと反応をしてくれたことに安心したのか強ばつた表情を緩ませながら言つた。

「はい、次は二ノ宮さんの順番になつたので……」

言われて桺が教室を見渡すと、既に試験が終わった生徒は教室から居なくなつており、現在残つているのは桺以下七人だつた。

桺よりあの生徒は更に待つ時間が長いからだろう、何人かは恨みがましい視線を送つていた。

「…………今すぐ始めます」

居た堪れなくなつた桺はすぐに立ち上がり、教師の指定した線の上に移動した。

桺の立ち位置と目標の立方体の間には他の生徒が神技を外したのであらう焼け焦げた跡や水溜まりが出来上がりついていた。学園の床自体は何か特殊な仕掛けが施されているようで、時間とともに自然修復していくのだが、さすがに十分やそこらで直し終わるわけではないようだ。

桺は一つ息を吸つて対象を見定めた。

「それでは、お願ひします！」

教師の言葉を合図にして、視線の上に掌が重なるように手をかざす。

「『辰氣操作』！」

……桺が神技を発動した後、対象である立方体はそれを乗せていた台ごと床に沈みこみ大音量を響かせた。

桺の後の生徒は後日に試験を受けなければいけなくなつたことは言つまでもない。

知られぬ『才能』

三限終了から大した間も無く四限の剣術訓練が始まった。

指導者は学内では恐らく一番の実力を持つ佐々木傭兵だった。

先程の教官とは異なり、訓練開始の十分前：つまり三限終了時には既に到着しており、一人でほぼ全員分の竹刀・木刀・防具を用意していた。

休む間もなくそれが用意された物を身に付け始め、開始時間と同時に模擬戦を始められるようになっていた。

開始から十分。

それぞれ実力に合わせて組んだ生徒たちは竹刀での打ち合いを行なっていたが、やはりというべきか、そこには覇気どころか気迫すらも感じられなかつた。

時代が進むに連れて近接戦闘から遠距離の火力戦へと移り変わつてゐるため、先の時間のように熱心に打ち込む生徒はいないに等しかつた。

心構えのなつていらない人間に対してもアドバイスをいくつかしようが無駄であることは充分に理解していたため、佐々木は全体を見回るフリをして、とある場所へと向かつた。

小校庭の隅で、二人の『武人』が対峙していた。

五十嵐要と、獅童龍一だつた。

その周辺だけが戦場になつたかのような雰囲気を醸し出しながら、互いに木刀を構えていた。

防具は一切なし。

木刀とはいえど、当たりどころが悪ければ死亡してもおかしくない。

互いの鋭い気迫が、ぶつかり合つ。

「……………」

要は八相の構えに少し工夫を加えた構えを。

対する龍一は青眼の構えを。

要の構えは木刀の背を肩に乗せるか乗せないかといった場所に置き、重心を前方に移すだけで降り下ろせるような物であった。

肩から降り下ろされるであろう袈裟斬りが狙うは最も面積の広い胴体。

生半可な攻撃では防がれて反撃されることが目に見えるが、要の実力・腕力を知つて、さらにはその一撃を受けたことのある佐々木にとつては充分な驚異であることは理解出来た。

更に受け流されても構えの特性上次の攻撃…裏切上に素早く移ることが出来るという利点がある。受け止められれば少し木刀を引き、突き出せば良い。

龍一は本来の青眼の構えより切つ先を僅かに落としていた。

刀身の延長線上には要の喉が有つた。

『突き』による間合いは踏み込む分普通の『斬り』の間合いより伸びるが、反面狙う面積が喉という狭い範囲なうえに、外した場合のリスクは計り知れない。

というのも、『突き出す』以上は腕を伸ばさなければ充分な威力は生まれず、最大の威力を出すには全身のばねを伸ばさなければならぬ。

そして狙うは喉である以上、当たる確率よりは回避される確率の方が高い。

だがそれも、『天才』にとつては些細な事だつた。

龍一ならば例外しても即座に刃先を変えて第二撃を繰り出すことは容易であらう。現在の間合いから要が『突き』を避けるための手段は四つ。

一つは後退…だがこの場合は余分な前後移動をしなければならなくなるため、余程の素人でなければ選ばない手段である。故に却下。二つ、三つは左右に移動して避けること…要の構えの性質上、右に避けねば最も木刀を長く振らなければいけないうえに、不自然な

体勢から振り出す以上充分な力が伝わらない場合がある。左に避ければ木刀の描く軌跡が最短故に最速の反撃にはなるが、その『後手』を外した場合は大きな隙が生まれてしまう。

四つ目は『突き』を切り払う、受け流すなどをした上で『反撃』。成功すれば最も安全に反撃に移ることが可能になるが、失敗すれば間違いなく被撃。ハイリスクミドルリターンの手段である。

実際の戦場では時間が限られている上に、失敗は死に直結する以上一と四の手段は必然的に可能性が低くなる。自然、残るは一と三の手段になる。

「…………」

「…………」

どちらも先手必殺の手段を持ちつつも、後手必殺の手段も持ち合わせているため、互いに迂闊に攻撃することが敵わない。

故に膠着状態。

素人なら、何もしていない状況に見えてしまるのは仕方がないが、運の良いことにこの戦いを知っているのはこの場にいる三人だけである。

構え自体が牽制の、達人の領域に近い戦いを、静かに繰り広げているのだった。

（折角なので賭けでもしてみるか…勝つ方を予想して、当たれば晚酌のツマミを一品増やす、で…）

教え子を利用して一人ギャンブルをしていると、前触れなく動きが有った。

先に動いたのは龍一で、素早く一步踏み込みつつ腕を伸ばして突きを放つた。

全体重を乗せた、重い一撃であり、掠るだけでも充分な痛手を与えることが可能だろう。

最短距離を、最速で。

「……」

だが、要は紙一重でその一撃を避けることに成功した。

解りにくかつたが、要の構えは龍一の青眼の構えと違つて『窮屈』ではない。

前と左右に動く事が容易であり、点の攻撃である突きを左前方に進むことによつて回避と同時に間合いを詰めることにも成功した。そして先程記述したように、突きの攻撃は必殺の威力を持つ反面、放つたあとの隙が非常に大きいという欠点を持つ。

龍一もこのことを予想できなかつた訳ではないだろうが、まさかと思った手段で来られる、ということを予想できなかつたのだつた。後退でもなく。

弾くでもなく。

真正面に進む、その姿に驚きを隠せなかつた。

そして、決着がついた。

突きから半ば無理矢理に木刀で薙ぎ払つように振るおうとしたが、初動作は要の方が遙かに速かつたため、要の木刀が龍一に触れる方が速かつた。

龍一の攻撃は、拳一つ分の間がまだ残つていた。

静かな戦いは、静かなまま幕を下ろした。

「参つた。俺の負けかあ……」

緊張の糸が切れたのか、龍一は全身の力を抜きながら木刀を下ろした。

それを見て、要も額に滲んだ汗を腕で拭いながら構えを解いた。「しかし、龍一も良いタイミングで仕掛けてきたな。一瞬の呼吸の間を取られるのは予想外だつたぞ……」

「それでも勝てなかつた…少し焦りすぎたか?」

「それは分からぬが…取り敢えず腕は互いに鈍つていよいよだから安心したな」

「同意。差を付けられていないか不安だつたが、これなら大丈夫そうだな」

そこで二人は糸の切れた人形のように崩れ、小校庭の片隅で大の字になつた。

「それじゃあ佐々木教諭、俺たちはしばらく休ませてもうります…
さすがにこれを連續、というのは無理なん…」

「自分も同じ…なので小休憩を挟ませて…」

「ああ、その程度なら問題ないぞ。自分のペースで好きなように試
合してもううだけだから、無理だと判断すれば好きなだけ休んでお
け」

口調を崩した佐々木は、一人の要求をすぐに受け入れた。

「…では失礼して…」

「それじゃあ、俺は他の生徒も見て来る。午後の講義に遅れないよ
うにだけ注意して…って、もう聞こえてないな…」

既に寝息を立て始めている一人を見て、佐々木は静かにその場か
ら離れた。

極度の集中状態を三十分程維持していた反動なので、精神・身体
共に疲れきっている状態だろう。

動いていれば反動も少なく済んだだろうが、戦い方が達人顔負け
の、長時間の睨み合いだったので、莫大な負担が両者にかかってい
たのだった。

あれだけの試合を魅せられてしまえば、他の生徒の打ち合いは児
戯にも等しく、佐々木の心は他の教官が褒めるような生徒を見ても
波一つ立てるとはなかつた。

（まあ…これで今晚は…）

試合の賭けを思い出して、彼は静かに微笑んだ。

（スマミ一品追加…だな。あいつにバレないようつに気を付けないと、
だな…）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5704z/>

装甲護神 影継

2012年1月5日20時55分発行